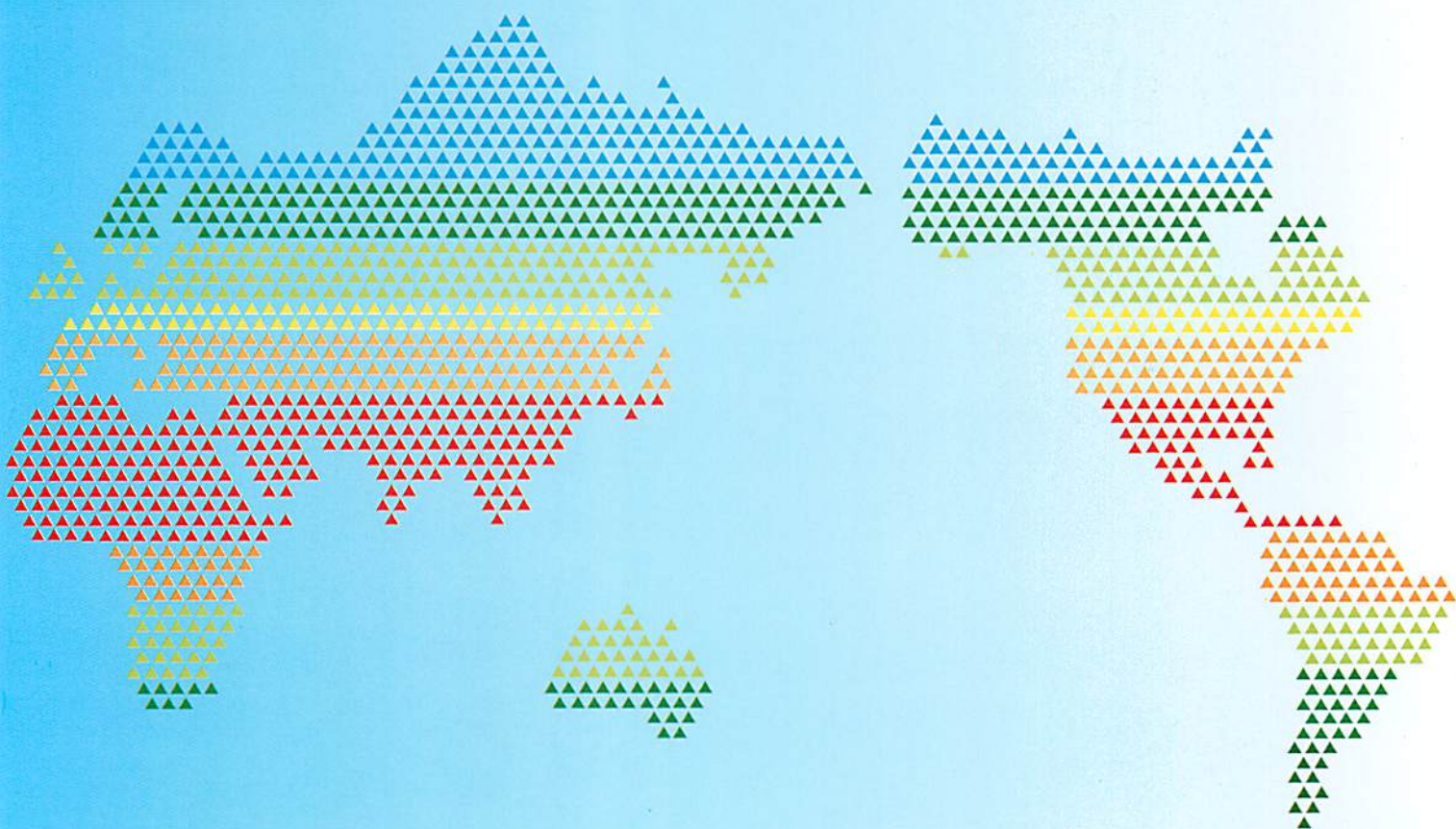


2011(平成23)年度
教科・領域等研究
外国語活動・英語科

伝え合う喜びを大切にした 授業づくり



はじめに

小学校での外国語活動について、当センターで研究が始められたのは、2003年（平成15年）でした。「子どもの心を広げる ～ドラマ的な活動を取り入れた小学校英語活動～」という研究テーマについて、小学校教員3名、中学校教員2名が集まって、研究を始めました。「普通の小学校の先生ができる英語活動の開発」を念頭に置きながら研究を進めてきたことが、研究報告書に述べられています。

その研究に引き続いて、2006年（平成18年）からの3年間は、新たな研究メンバーによって、「チャレンジ！！英語活動 ～『英語ノート』はじめの一步～」というテーマで研究が進められました。『英語ノート』を利用した授業を実践し、課題を整理しながら、さまざまな授業についての提案を研究報告書にまとめました。

そして、今回、2009年（平成21年）からの3年間、藤沢市の小学校で外国語活動が望ましい形で実践されるために何ができるのかということについて、また、新たな研究員が模索し、研究した成果を報告書としてお届けいたします。1年目の研修講座「エンジョイ！外国語活動」、2年目に市内の全小・中・特別支援学校に配布した「外国語活動かんたんレシピ」、3年目の「伝え合う喜びを大切にしたい授業づくり」という研究テーマに向けたさまざまな授業実践の取り組み等、充実した内容になっています。また、この9年間の外国語活動の研究では、常に小学校の教員と中学校の教員とが協力して研究を進めてきました。第4章では、小・中学校の連携について、意見交換とアンケートの結果をもとに提言や課題がまとめてあります。さらに、第5章では、研究部会の講師としてご指導をいただいている佐野正之先生に「外国語活動の正しい指導法とは」という内容でご寄稿をいただきました。外国語活動の指導の本質を、わかりやすく解き明かしていただいています。

今年度、小学校では、新学習指導要領が完全実施となり、5・6年生の教室では、年間35時間の外国語活動が実施されてきたことと思います。1年間経過した今、この報告書を開いていただいて、外国語活動の更なる充実に活用していただけることを願っています。

最後になりましたが、横浜国立大学名誉教授の佐野正之先生には、3年間にわたり、丁寧なご指導をいただきました。深く感謝いたします。

2012年（平成24年）3月

藤沢市教育文化センター長 泉 在道

目次

●第1章 研究の概要

- 1 概論 長後中学校 清水 亘 1
- 2 研究テーマと研究の経過 4

●第2章 1・2年目の取り組み

- 1 授業研究セミナーにおける実践 鵠洋小学校 及川 浩子 6
- 2 「外国語活動かんたんレシピ」
 - (1) 「外国語活動かんたんレシピ」について 11
 - (2) 「外国語活動かんたんレシピ」を使った実践 1 . . . 六会小学校 河端 暁彦 12
 - (3) 「外国語活動かんたんレシピ」を使った実践 2 . . . 鵠洋小学校 及川 浩子 16
 - (4) 「外国語活動かんたんレシピ」へのリアクション . . . 大庭小学校 小島 立己 18
 - (5) 実践研修講座について 19

●第3章 3年目の取り組み

- 1 研究テーマについて 24
- 2 4年生における外国語活動の実践 六会小学校 河端 暁彦 29
- 3 英語劇の実践 鵠洋小学校 及川 浩子 35
- 4 授業研究セミナーにおける実践 本町小学校 辻 真由美 38
- 5 中学校での実践～小学校のタスク活動を活かして～ . . . 第一中学校 山浦 希 45
- 6 実践を振り返って 52

●第4章 小中の連携

- 1 小中の連携を探る 54

●第5章 3年間の研究を振り返って

- 1 外国語活動の正しい指導法とは 横浜国立大学名誉教授 佐野 正之 58

●資料

- 1 『外国語活動かんたんレシピ』の指導案 66

第1章 研究の概要

1 概論

はじめに

部会で研究を開始してまずとまどったのは、藤沢の現状と学習指導要領の求める理想とのギャップである。このギャップは、外国語活動が小学校に導入されてから生まれたものではなく、それ以前からの経過で発生したものなのである。そこで、まず、外国語活動以前の英語活動から振り返ってみよう。実は、英語活動自体、長い準備期間の後にやっと実現したものなのである。

文部省レベルで英語活動が最初に注目されたのは、1986年（昭和61年）4月の臨時教育審議会において、中・高等学校での英語教育改善が取り上げられ、開始時期も含めての検討が進められた時である。その後研究開発学校が各都道府県に1校指定され、1996年（平成8年）7月の中央教育審議会答申において、国際理解教育の一環として、地域や学校の実態等に応じて取り組むことが適当とされた。これを受け、1998年（平成10年）に改訂された学習指導要領に新設された「総合的な学習の時間」の国際理解に関する学習の一環として、外国語会話等（いわゆる英語活動）に取り組むことが可能となったのである。そして保護者からの要請などもあって、英語活動への関心は急速に全国的に高まっていった。

全国的に見れば、英語活動に取り組む学校は年々増え、平成15年度には全国の小学校の約88%が、さらに平成19年度までには約97%が、何らかの形で英語活動を実施していることが文部科学省の調査でわかった。このような状況から、2006年（平成18年）3月、中央教育審議会外国語専門部会によって、年間35単位時間（平均週1回）程度について共通の教育内容の設定の検討がされ、それを受けて、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」において、「総合的な学習の時間」とは別に高学年において一定の授業時数（年間35単位時間、週1コマ相当）の確保が答申されたのである。英語活動熱は全国に広まった。

この動きに連動して、県内ではまず指定された学校が外国語活動に取り組み始め、校内研修を重ねることによって少しずつ問題の共有化がなされ、資料の蓄積とともに担当教員の負担が軽減されていく様子が報告されるようになった。隣の横浜市はこうした動きの急先鋒であった。藤沢市でも2003年（平成15年）に藤沢市教育文化センターでの研究として「小学校英語活動」が立ち上げられ、小学校と中学校の教員が集まり、試行錯誤が始まった。しかし藤沢市の小学校では校内研修も思うように進まず、各学年、担任の個人的な努力に頼っている現状が多く見られた。

一方、海外に目を移せば、ヨーロッパや国連の動きだけでなく、アジア諸国を見ても日本の外国語教育の遅れは明らかとなり、世界の主要4ヶ国において外国語を小学校で課していないのは、ブラジル、トルコ、日本の3ヶ国だけとも言われるようになった。そしてついに2008年（平成20年）3月に日本でも学習指導要領が改訂され、小学校第5、6学年に外国語活動が導入された。それを受けて藤沢市ではFLT（当時はALT）が来校する時間数が急増した。それ自体は歓迎すべきことではあるが、雇用形態との関連もあって、授業内容の打合せの時間が思うように確保できず、『英語ノート』などの指導案はあっても、スムーズに授業を進められない状況も多くあった。私たちが研究を開始したのは、このような時期であった。

今回の3年間の研究は、大きく言えば、状況が大きく変化する中、少しでも藤沢市の小学校で外国語活動が望ましい形で実践されるために何ができるかを模索した研究員の取り組みだと言える。「校内研修の

あり方」「実践研修講座（エンジョイ！！外国語活動）」に始まり、次第に「FLT との TT における担当教員の役割」「『英語ノート』を使った外国語活動かんたんレシピ」へと移行し、3年目には「小中の交流（授業参観）」「授業研究セミナー」等の取り組みがなされた。このような取り組みと並行して、研究部会では、「外国語活動の目標」「学級担任（外国語活動担当者）の役割」「藤沢市教育委員会の解釈」という3点について話し合ってきたので、ここで少し触れてみる。

(1) 外国語活動の目標

言うまでもなく学習指導要領では、外国語活動の目標の柱を次の3つとしている。それらは

- ①外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、
- ②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、
- ③外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、

コミュニケーション能力の素地を養うこと

である。だが、この文言をどのように理解すればよいのか。中学校の英語授業との関連でどのような解釈が適切なのか。たとえば、ここで用いられている「コミュニケーション」とは様々な解釈ができ、今回の研究でも最も議論が白熱したところである。詳細については第3章1を参照されたい。

(2) 学級担任（外国語活動担当者）の役割

まず、学級担任（外国語活動担当者）の役割を考えるにあたって、現場の声を拾ってみた。すると『英語ノート』の指導資料等に記載しているような英語表現を見てしまうと、それをすべて覚えて児童の前で話さなければならないような錯覚を覚え、不安になってしまうという声が聞かれた。また、FLT との打ち合わせ時間が十分に取れないことなどから、FLT にすべて任せてしまうようなケースがあることもわかってきた。

本来ならば、外国語活動では積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成のために「体験的な活動」が必要であり、普段から児童をよく理解しているクラス担任が活動内容の設定やクラス運営に当たることが理想的である。というのは、「体験的な活動」とは児童の「こころ」と「頭」と「身体」が動く活動であるから、児童が興味・関心を示す題材のもと、児童が「やってみたいと思う」「思わず聞きたくなる」「思わず言ってみたくなる、話してみたくなる」活動の設定が大切であり、そこではクラス担任をおいて他に適任者はいないからである。研修を受けているとは言え、FLT が個々の児童を理解したり、クラスをコントロールしたりすることは難しい。ただ、このことは FLT の質は問わないという意味ではない。なぜかという FLT 自身の日本の学校教育に対する考え方や「母国語を外国人に教える」ことが実はいかに難しいものかという認識があるかないかによって、授業内容も質も大きく異なるからである。

このようなことから、担任の役割としては、まず、実態にあった内容の授業を展開（コントロール）するなかで、外国語を使ってコミュニケーションしようとするモデルになり、児童の特性に合わせて個別に指導したり、評価（はげまし）したりすることが大切だと考える。いわゆる「教室英語」は徐々に増やしていけばよいが、英語での簡単なほめ言葉などは積極的に使うようにしたい。FLT の役割は外国語のインプットを与えることだと考える。すなわち、各単元に設定されている使用表現をできるだけ使うようにしたうえで、児童の身の丈にあった英語を使用し、児童とインタラクションすることが大切である。

(3) 藤沢市教育委員会の解釈

2011年(平成23年)4月に藤沢市教育委員会教育指導課より『藤沢市小学校外国語活動・国際理解協力員の手引き(改訂版)』が各学校に配布された。しかし小学校の教師全員に配布されたわけではないので、学校によっては外国語活動を担当する教師しか受け取らないケースもある。

このような事情から、上記の『手引き』はあまり小学校の教師に知られてはいないのだが、本研究会ではそれを詳しく読み、内容について議論した。その結果、全83ページに及ぶこの『手引き』は、文部科学省の指針をより具体的にまとめたもので、とてもわかりやすく示唆に富んでいることがわかった。まず、英語に慣れ親しみ、使えるようにすること、コミュニケーションを図る楽しさを体験させ、その大切さを知るように指導することとし、必要以上に細部にわたった指導や、形式的なもの、覚え込ませるものはよくないとしている。他にも文字の指導は音声面を補助する程度とすることや、年間計画においては全体のバランスを見ながら、タスク活動中心の単元を構成してもよいとしている。授業の展開についても、基本を「ウォーミング・アップ」「前時 or 関連の復習」「導入」「練習」「活動」「まとめ」と具体的に示している。

また、藤沢市では独自の国際理解協力員との授業を第1～4学年で行っている。そのねらいは、自国の文化に対する理解を深め、他国の人々に簡単な英語を使って発信することによって、学校教育ふじさわビジョンにおける「新しい知」を育むことだとしている。さらに、外国語活動のコミュニケーション能力の素地を「いろいろな人とのコミュニケーションから、互いを認め合う、よりよい人間関係を作ろうとする土台づくり」と捉え、自他の文化への理解(国際理解教育)を深めることとしている。とすれば、両者を有機的に結合することで、学校教育ふじさわビジョンに一步近づけるのではないか。これも今後の研究課題である。

まとめ

残念なことに、これらの内容が中学校や小学校の教師に正しく伝わっていない。とてももったいない話である。私たちが研究のテーマを「伝え合う喜びを大切にしたい授業づくり」としたのは、今後藤沢市でも、第5、6学年の担任や担当者だけでなく、小・中・特別支援学校の教師全員が外国語活動について正しく理解をしたうえで担当者はきちんと意図を持って授業を計画し、児童に楽しく外国語活動を体験させるべきだと考え、その一助となればと願ったのである。この思いが藤沢市の学校全体に、また、地域の教育行政に生かされることを願ってやまない。

2 研究テーマと研究の経過

研究テーマ

伝え合う喜びを大切にした授業づくり

本研究部会の前身である英語活動・英語科研究部会では、国の教育政策として小学校英語活動の具体的な方向性がまだ提示されていない時期に研究を進め、2006年（平成18年）3月に『子どもの心を広げる～ドラマ的な活動を取り入れた小学校英語活動～』という報告書を3年間の研究のまとめとして発刊した。次の研究部会では、新しい学習指導要領が告示された2008年（平成20年）3月をまたぐ3年間における研究のまとめとして『チャレンジ!!英語活動～英語ノートははじめの一步～』という報告書を発刊した。この6年間はまさに小学校における英語活動が大きく揺れ動いた時期である。そして、その後を引き継ぎ、新しいメンバー（小学校：3名・中学校：2名・講師：横浜国立大学名誉教授 佐野正之氏）で研究をスタートさせたのが、2009年（平成21年）4月である。研究部会の名称も外国語活動・英語科研究部会と改められた。

そもそも、教育文化センターの研究部会は、小学校、中学校の教員が共同して研究を進めているため、校内だけでの研究や実践に比べ、広い視野をもって研究を進められるところが、大きな利点といえる。私たちの外国語活動・英語科研究部会においてもこのような利点を活かしながら研究および実践を進めてきた。

研究の大まかな流れ

●1年目

教育文化センターの担当、各学校からの研究員全員が新しいメンバーとなり、まず直面したのは、一体何をどうしていけばいいのか、という状況である。そこで、これまでの研究の流れを意識しながらも、自分たちの研究の中心をどこに置くか、というところからスタートした。話し合いとしては、平成23年度から完全に実施される新学習指導要領において外国語活動が本格的に導入されることを受け、まず自分自身の外国語活動の授業をどうするかという点を中心であった。様々な文献を読み進める中、私たちが持った共通認識は、「教師自身が外国語活動を楽しむことが必要」ではないかということである。

このような認識のもと、夏には「エンジョイ!!外国語活動」というタイトルで研修講座を実施した。この講座では前研究員にも協力してもらい、様々な活動を参加者に体験してもらうという、とても実践的な講座となった。

冬には研究員の及川先生による授業研究セミナーを実施した。この授業は主にFLTとの関わり方を含めた授業の進め方に焦点をあてて授業を組み立てた。参加した先生方から多くの貴重な意見をいただいた。

このような活動を通して、研究員自身が外国語活動の授業の進め方についてある程度の自信を持つことができるようになった。

●2年目

外国語活動の本格的な実施を目前に、たくさんの不安を抱えた先生方の負担を少しでも軽減することが

できたら、という思いで「外国語活動かんたんレシピ」という便りを本研究部会から発行し、藤沢市内全小・中・特別支援学校に配布した。学級担任の先生方は、学級経営と教科指導を同時進行しながら、校務や児童指導をもこなしている。多忙な日々の中で、新しく外国語活動を行うわけなので、どの先生方にも同じように実践していただくためには、取り組みやすさを重視したものにすることがとても大切であると考えたのである。

夏にはこの「外国語活動かんたんレシピ」をベースにした講座も実施し、多くの先生方に参加していただいた。この講座の内容については第2章で詳しく述べている。

また、便りの発行と並行しながら研究部会として、ある種の焦りがあった。それは、外国語活動を広めることが研究員の本来の役目ではないのではないかということである。やはり、自分たちの力をつけ、研究を深めていきたいという思いが募ってきたのである。研究を深めるにあたっては、小中連携という縦のつながりと、小学校の外国語活動そのものの横の広がりの方を考えなければならなかったが、どちらにしても児童や教師が「喜び」を感じなければならないと考えた。詳しくは第3章で述べるが、このような経過を辿る中で見えてきたのが、研究テーマとして掲げている「伝え合う喜びを大切にしたい授業づくり」である。やっとテーマに巡り会えたというのが2年目の実感であった。それも、「外国語活動かんたんレシピ」作りに真剣に取り組んだ成果ともいえる。

●3年目

さて、いよいよ3年目、一言でいえばテーマに向けた研究員一人ひとりの取り組みが具体的にスタートした年といっていだろう。研究のまとめの年でありながら、充実した実践の年であったともいえる。

3年目は「伝え合う喜びを大切にしたい授業づくり」というテーマに向け、どのような方法でアプローチをしていくのか、そして、それをどのように実践し、検証していくのか、そんなことを悩みながら各自が取り組んだ。具体的な実践内容は、第3章に述べているのでここでは、概要のみにとどめる。まず、小学校の取り組みとしては、河端先生の4年生における英語の授業、及川先生の劇づくり、そして、辻先生の授業研究セミナーにおける「道案内」の授業である。中学校の取り組みとしては、山浦先生のタスク活動を生かした実践である。また、これらの各実践の理論面を支えてくれたのが清水先生であった。

このような実践を通し、「どうしたらいい授業になるのか」という授業の質にこだわりをもって取り組んだ3年目であった。

ちょっとひと休み

アルファベットの歌

ABC

♪The Alphabet Song♪

A B C D E F G
H I J K L M N
O P Q R S T U
V W and X Y Z
Happy. Happy. I'm happy.
I can sing my ABC.

アルファベットの歌はみなさんよくご存じだと思います。左は英語ノートにのっている歌詞。右はアメリカでよく歌われている歌詞です。どちらも「きらきら星」のメロディーで歌うのですが、アメリカの歌詞は日本人にはなかなか難しいですね。

♪The Alphabet Song♪

A B C D E F G
H I J K LM NO P
Q R S T U V
W X Y and Z
Now I know my ABC's.
Next time won't you sing with me ?

おわりに

「外国語活動を勉強するのは世界平和のためなんだよ」と3年前、この研究がスタートしたばかりの頃、佐野先生から伺いました。それまでは子ども達に「どうして英語を勉強するの？」と聞かれると、「将来、仕事で困らないようにだよ」とか「海外旅行に行ったときに楽しいしさぁ」などと答えていた私には、とても新鮮でかつ腑に落ちる言葉でした。違った文化を持ちながらも、共通の言語で語り合うことの大切さ、そのことに改めて気付かされたのです。勉強することで、一人ひとりが豊かになることも大切ですが、それだけにとどまらず、日本中、さらには世界中の人たちが豊かになるのだとしたら、勉強ってすごく魅力的ですよ。

3年間、講師の佐野先生には多大なご支援をいただきました。心より感謝申し上げます。また、研修講座や授業研究セミナーにご参加くださり、たくさんの貴重なご意見を下さった先生方、本当にありがとうございました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

教科・領域等研究 外国語活動・英語科

伝え合う喜びを大切にした授業づくり

2012年（平成24年）3月発行

藤沢市教育文化センター 外国語活動・英語科研究部会

講 師 佐野 正之（横浜国立大学名誉教授）

研 究 員 辻 真由美（藤沢市立本町小学校教諭）

河端 暁彦（藤沢市立六会小学校教諭）

及川 浩子（藤沢市立鵠洋小学校教諭）

山浦 希（藤沢市立第一中学校教諭）

清水 亙（藤沢市立長後中学校総括教諭）

元研究員 向津 直輔（藤沢市立鵠沼小学校教諭）

担 当 石井 宏樹（藤沢市教育文化センター指導主事）

松本あんな（藤沢市教育文化センター研究業務員）

谷川美津江（元藤沢市教育文化センター研究業務員）

編集発行 藤沢市教育文化センター

〒251-0002

神奈川県藤沢市大鋸 1407-1

TEL 0466-50-8300

FAX 0466-82-4764

URL <http://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/kyobun-c/>

E-mail kyobun-c@city.fujisawa.kanagawa.jp

印刷所 湘南グッド 0466-25-2151

